

# 現世での上昇

ブラジル世界救世教のアイデンティティーをめぐって

松岡 秀明

## 1. はじめに

日本の宗教が異文化の中で布教を開始してから既に1世紀が経過しようとしている。1890年代、仏教各派はハワイでの布教を開始し、新宗教も天理教が遅くとも今世紀初頭には台湾や朝鮮半島で布教を開始していた。日本の宗教の海外での布教は、井上の用語を借りれば「海外出張型」の布教—海外に住む日本人や日系人を主な布教の対象とした布教—から出発したが、現在ではそれ以外に非日系の現地の人々に対する積極的な布教—井上によれば「多国籍型」の海外布教—も行なわれるに至っている(井上1985:217)<sup>(1)</sup>。しかし、重要なことは「海外出張型」にせよ「多国籍型」にせよ、日本の宗教が海外で布教する場合には日本の教団本部がその中心であるということである。現在、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリア、そしてアフリカのそれぞれの大陸で日本の宗教が布教を行なっているが<sup>(2)</sup>、ある国で布教している日本の宗教教団が独自性を獲得することは、日本の本部にとって望ましいことではないと思われる。1920年代にブラジルでの布教が開始された大本を例にとると、1935年に起こったいわゆる第2次大本事件で日本の本部が壊滅的な打撃を受け日本ブラジル間で信者の連絡が途絶えた結果、土着のスピリティズムから影響を受けるに至った大本信者が存在する(Maeyama and Smith 1983:84-5; 松岡1997:19-20)。本部が海外での布教活動の拠点と密接な関係を保っている背景には、教団のアイデンティティー拡散防止という意図もあると考えられる。

私はこの論文でブラジル世界救世教(以下、特記がない場合「救世教」はブラジル世界救世教を指す)を対象として、救世教はどのようにその日本で生じた宗教というそのアイデンティティーを維持しようとしているのかを考察してみたい。

## 2. 組織としての教団——企業との対比において

明治政府による開国よりこのかたさまざまな規模や形態の日本の企業が海外で会社を運営してきた。教義という神の摂理に依拠して布教を行なう宗教と資本主義の経済原理に基づいて活動する企業との間には、言うまでもなくさまざまな相違がある。一般論で言うならば、企業にまして宗教の方が現地の諸制度と軋轢を生じやすい。なぜなら、宗教は世界観を提供する制度であり、ある宗教に入信するということは程度の差はあれその宗教の世界観へのコミットメントが要求されるからである。しかし、その一方いくつかの重要な共通点を共有しているとも考えられる。たとえば、異文化の中で活動する組織という点で、企業も宗教も共通する困難を抱えているであろう。するとまず企業や宗教はどのようにその文化のなかで円滑に経営や布教を行なうかという問いをたてることができる<sup>(3)</sup>。また、日本で生まれた企業あるいは宗教というアイデンティティーを維持していくのか、あるいは全く現地の企業や宗教と同じ立場で営業あるいは布教するのか。

日本企業と日本宗教を対比して考察した嚆矢である中牧の研究は、異文化の中で布教している日本の宗教から三つの類型を抽出している(中牧 1986:142-67)。類型1は、日本の教団本部に海外布教体制がほとんど存在せず、現地の施設がほぼ孤立無援で異文化との対応を余儀なくされている宗教。ハワイの諸神社—伊勢神宮、出雲大社、金毘羅神社、石鎚神社などの系統の神社—がその典型である。つぎに類型2は、教団は布教する文化の諸要素を表面的には取り入れるものの、日本の宗教形態をそのまま移植しようとする姿勢が強い宗教。仏教諸宗派、天理教がこの類型の代表的な教団である。そして類型3は、積極的に現地の文化を取り入れ、儀礼をも変容させる宗教。生長の家、世界救世教、PLといった新宗教のいくつかの教団がこの類型に含まれる。

中牧のこの類型は有効だと私は考えているが、ブラジルの日本の新宗教をより微細にみていこう。第2次世界大戦を境として日系新宗教の布教のあり方には差異が認められる。第2次世界大戦終戦までのブラジルの日系新宗教の布教は、移民としてブラジルへ渡った日本人が、教団からの援助を受けずに自発的に布教を始めたり、教団から指令は受けたが十分な資金は供与されずにブラジルへ渡ったため、労働の合間に布教を行なうという形態をとっていた。1908年の最初のブラジル移民のなかに信者がいた本門仏立宗、1920年代の大本、1930年代の生長の家がそれである<sup>(4)</sup>。一方、終戦後開始された布教は、PL(布教開始1957年)や創価学会(同1960年)を代表として、ほとんどの場合教団の専従者の派遣で開始された本部指導型である。そのなかで、世界救世教は例外的である。というのは、1956年日本で専従者だった青年が助手一人を伴い本部の支援をまったく受けずに布教を開始したからである。この点においてブラジルでの布教開始当時の大本や生長の家と共通点がある。第6節で救世教が開拓布教—信者が全くいない土地で布教を開始し信者を獲得すること—を重視していることについて論じるが、このエピソードにもそれが見て取れる。

海外の布教が成功を収め一定の信者が集まるにいたると、日本の本部で外国での布教を管理する部門—たとえば国際局といったような名称を持つ—が設置された。この流れは当然なこととして理解できよう。なぜならば、日本の教団本部としては教団のアイデンティティーを保持するために必要な手続きであり、現地で布教を開始した者にとっては自らの正統性を主張できるとともに、日本の本部からの積極的な援助も期待できる。

ブラジルの支部は、本部と密接な関係を維持しつつ、そして日本で誕生した宗教であるというアイデンティティーを保持しつつも、異文化のなかで布教を行なっている。中牧によれば、以下の5つの要因が日本の新宗教のブラジル人への浸透の原因・背景として指摘されてきた(中牧 1990:628-9)。1.ポルトガル語の採用、2.非日系リーダーの養成、3.ブラジルの生活・思考様式の採用、4.日本の本部の支援、5.ブラジル人の日本・日本人に対する敬意。1から4まではブラジルで布教を行なっている日本の新宗教のそれぞれについて検証することが可能であり、救世教についてはこれら4つの要因が認められることを私は既に指摘したし(松岡 1993)、PLについては中牧が1, 2, 3の要因が認められるとしている(中牧 1986:153-161)。一方、生長の家についても1から4の要因すべてが認められる。中牧が挙げる5つの要因のうち、本論文にとっては2と3、すなわち非日系リーダーの養成、と、ブラジルの生活・思考様式の採用、が重要である。これらの要因は、日系新宗教がコロニアと呼ばれる日系社会を越えブラジル社会全般に浸透するためには不可欠であるが、同時にそれらは「日本で誕生し日本文化という背

景を持つ宗教」というその宗教のアイデンティティーを脅かしようとする刃の刃であるということができよう。

ブラジルにおける日本、アメリカ、ヨーロッパの多国籍企業の子会社について研究したハルバートとブランドは、日系企業では相対的にトップに日本人が多く、本社のコントロールが厳格であると述べている (Hulbert and Brandt 1981: 146-8)。また、中川は日系企業の海外での関連会社の社員に占める日本人の比率の高さを指摘している (中川 1983)。日本企業は海外の子会社・関連会社の日本企業の子会社・関連会社としてのアイデンティティーを、(1) その会社の要職への日本人の配置、と (2) 本社の強い統制、によって維持していると考えられるが、このような構造は「純血主義」と呼びうるものである。

### 3. ブラジルにおける日系新宗教のなかでの救世教の特殊性

では、ブラジルの日系新宗教は純血主義をとっているのか。信者数からみてブラジルでの日系新宗教のなかでの主要三教団—生長の家、救世教、PL—教会を訪れてみよう。そこには多くの非日系ブラジル人信者が集っている。そして、専従者も非日系である場合が多い。しかし、専従者の位が高くなるにつれて、日本人や日系ブラジル人 (ethnic Japanese) の比率が高くなる<sup>(5)</sup>。そして、三つの教団のトップはいずれも日本人あるいは日系人である。すなわち、生長の家、PLとともに救世教もアイデンティティー維持のために純血主義をとっているが、そこには差異が認められる。救世教の戦略をPLや生長の家のアイデンティティー維持戦略と比較することで明確にし、分析してみよう。

1930年代から布教が行なわれてきた生長の家では日系人の指導者が多数おり現在のブラジルの責任者も日系2世である。またPLではブラジルの教団の最高責任者は日本から着任する。彼らは (これまで、女性の責任者が着任した例はない) 8~9年間ブラジルに滞在して、日本へと戻っていく。救世教は生長の家やPLとは異なっている。現在59歳の渡辺哲男ブラジル本部長は日本人である。1962年21歳で布教を志してブラジルに渡ってこのかた、彼はブラジルで布教を行なってきた。サンパウロやリオ・デ・ジャネイロで布教を行なった後に、本部入りして最高責任者となり今日に至っている。

渡辺本部長は、強力なカリスマを持つ指導者である。ブラジルでの責任者であるとともに日本の救世教の副総裁でもあるためブラジルと日本を行き来しており、ブラジルにおいては特別な祭典や年に一度開催される地上天国祭といった極めて重要な式典でしか信者の前で説教をすることはないが、ポルトガル語を自在に操る彼の説教はたいへん巧みで、聞くものを魅了する。そうした際の彼の説教の要点は『ジョルナル・メシアニコ』のような教団の月間新聞で大きく報じられることになる。教団幹部に目を転じると、現在教団での最高位の教師 (reverendo) は25人おり、そのうち13人が日本生まれの日本人である。彼らは布教を志して1960年代前半にブラジルへ渡ってきた人たちである。彼らが「いまだにフェジョン—豆を煮たブラジルの最も一般的な料理で、ご飯とともに食べる—だけはどうも好きになれない。肉だけの食事には慣れたけどね」とか「子供の教育、少なくとも大学教育は日本で」と語ることはある。しかし、彼らは既にブラジルに30年以上生活しており、ある教師が「ぼくらは、もう半分ブラジル人です」と語るように彼らの間にはブラジルへの同化志向が認められるのである。

1967年時点の救世教指導者によれば、当時救世教信者7000人の60～70%が、また入信はしていないものの教会を定期的に訪れる者 (frequentador) の数と信者数の合計した場合はおよそ90%が非日系信者だという (Maeyama 1983: 193)。前山は、大本、天理教、生長の家、救世教、P L、創価学会の6教団それぞれの信者に占める日系、非日系のパーセンテージを表にしているが、救世教の信者の非日系パーセンテージが最も高い。

表1：ブラジルにおける日系新宗教信者の日系人比率

教団	日系 (%)	非日系 (%)
大本	50	50
天理教	100	0
生長の家	99 - 100	0 - 1
救世教	40	60
P L	80 - 90	10 - 20
創価学会	100	0

出所：Maeyama 1983: 193

これまで見てきたことから判断すると、1967年に至るまで、救世教は生長の家やP L以上に非日系ブラジル人への布教を推進し、そして成功してきたと考えてよいだろう。しかし、当時の教団幹部は彼らが岡田茂吉の「宗教は世界的たれ」という主張を実現しているという充実感とともに<sup>(6)</sup>、救世教が「ブラジル化」してしまうことも危惧したのではあるまいか。このようなブラジル化のなかで、日本で生れた宗教という教団のアイデンティティーを維持していくのは容易なことではない。第6節で詳細に見ていく研修生制度は教団のアイデンティティー維持の試みの中心となるものだが、それが開始されたのは1971年なのである。

再び日本の海外企業のあり方を参照してみよう。日本の企業が海外進出する場合、それら企業は子会社として現地法人をつくる。河野はそのマネジメントの以下を3類型に分けている。類型1. 社長、工場長、各部門の部長すべてが日本人。この型は新たに設立された会社ないしは生産性を上昇させようとする会社で用いられる。類型2. 工場長、財務部門および技術部門の部長が日本人。技術部門には多くの日本人技術者がいる。この類型は技術集中企業に見られる。類型3. 工場長および財務部門の部長が日本人である以外には、幹部のアシスタントに日本人が多く見られる。このタイプは設立されてから久しい子会社に認められる (Kono 1984: 165)。

類型3では日本人は顧問的立場となるわけだが、ブラジルの日系新宗教3教団のなかで日本人がこのような立場をとっている教団はない。河野が指摘する海外の日系企業が経時的に類型1から類型3へ推移する傾向は、海外の日系新宗教には認められないのだろうか。私は、非日系ブラジル信者人が増えるに従ってそのような推移が起こるだろうと考えているが、現段階では非日系ブラジル人の教団幹部が十分に育成されていないのである。

#### 4. 中央集権システムの中枢としての本部

救世教の組織から見ていくことにしよう。救世教の指導者および布教施設のヒエラルキーは次のようになっている。指導者の最高位は教師 (reverendo) で、次が教師補 (ministro adjunto)、そして助教師 (ministro assistente) となる。救世教のヒエラルキーで最高位の教師は現在25名

で、先述のように日本人は13人だが、それ以外はサンパウロ州生まれの日系ブラジル人が1人、そして非日系ブラジル人が11人となっている。以下、教師補168名、助師707名が布教を行なっている。また、救世教はブラジル全土を7つの教区に分け、7名の教区長(Supervisor de Área)を責任者としている。

一方、布教施設は以下のようにカテゴライズされている。教会(信者数3,000以上)45、布教所(同700~3,000)、集会所(同150~700)。現在、教会は30あり、教会長(Responsável de Igreja)に任命されるには教師補以上の資格を持っていることが必要とされる。

救世教では「創意工夫」が重視されている。インディオ諸部族の言葉を別にすればブラジルで用いられている言葉はポルトガル語であり、地域によって発音に若干の差異は認められるものの、日本の各地で認められる方言のような言語の多様性はみられない。しかし、移民あるいは奴隷としてブラジルへと到達した人々がブラジルへと持ち込んだ彼らの文化を背景とする地域毎の文化的差異—たとえば、ドイツ系の移民が多いブラジル南部諸州と黒人奴隷が輸入の拠点であったバイア州の文化の隔たり—が明瞭に存在する。

救世教の各教会の教会長たちはその文化コンテキストの中で最も適切な布教法を模索することになる。1992年当時のバイア州の州都サルバドール教会の教会長はかなり色が黒く<sup>(7)</sup>、彼は「バイアにはバイアの文化がある」と語り黒人文化の影響を強く受けているバイアの文化を誇りに思っていた。ヨルバ族の宗教伝統の流れを汲む降霊宗教カンドンブレはブラジル各地で行なわれているが、バイアでは特に盛んである<sup>(8)</sup>。救世教では降霊を認めないが、ここでは信者で降霊のトランス状態に陥る者も珍しくない。そうした状態の信者にどのように対応したらよいか、平生の状態へと戻ってからどのようにその現象を説明するかについて専従者は考えることになる。この問題は教義の根本的な部分と関わってくるが、本部は指導方針を提示していないので、説明は現場の布教者の裁量に委ねられている。また、入信を希望する者や信者に対する教義講習には、入信教習、第1段階、第2段階まではテキストが定められておりブラジル全土で用いられているが、それ以上の講習、すなわち兼業であれ専業であれ布教者を志す信者に対する講習は教区長に一任されている。

教会の文化活動はどうであろうか。救世教に欠けているのは音楽だと考えたブラジリア教会の責任者は、1980年代後半に信者のコーラスを組織しその育成に力を注いだ。その結果、短期間で実力をつけたコーラスはさまざまな式典での好演が話題となり、その存在が全ブラジルの救世教信者に知られるようになった。この成功を鑑みて、90年代に各地の教会でコーラスが組織された。

しかし、こうした「創意工夫」による教区や教会の自主性も、本部が決定する教団の基本的な方針に添ったものに限られる。救世教はブラジルを7つの教区に分けているが、毎月月末に本部で行なわれる教会長会議には各教区の教区長と本部の教団幹部が出席する。この会議では様々な議題が討議されるとともに決定が下される。教区長会議の目的の一つは、広大なブラジルの隅々まで本部の意志を伝えることで本部による布教施設の統制を行なうことなのである。一方で、この会議は教区長が一同に会することによって、幹部の結束を高めるという機能を担っている。

この中央集権的なコントロールの背景として、日本で救世教からさまざまな教団が独立していった事実を理解しておく必要がある。日本の救世教は、その前身である日本観音教団の1947年の創立以来さまざまな分派・独立を経験しているが<sup>(9)</sup>、対馬は、この事態について次のように

説明している。救世教は「教会ごとの独立性が高い分権的な体質」を持っていたが、教祖岡田茂吉が1955年に没してから徐々に行なわれた「一元化」と呼ばれる中央集権化によって教団本部の権威が強まった。そしてこの一元化に反発する形でさまざまな分派・独立が起った、と(対馬1990:87-8)。一元化以前にも分派・独立があったことを考えると、一元化以前・以後を問わず分派・独立のその原因は教会毎の高い独立性に帰着することになる。このような経験がブラジルにおける中央集権化の一因と考えられる。

## 5. 本部の構造

ある文化の中核的な価値は、その文化で美的・道徳的に理想とされる身体に刻印されているとするベッカーにならって(Becker 1994:100)、ある宗教の中心的な施設はその宗教の理念を現すと私は考える。救世教の場合、「地上天国」のモデルとして1995年に完成した聖地ガラピランガには天国的なるものの理念を認めることができるがそれについては別稿で論じることにする。では、おおよそ90人の専従者が働き教団の管理・運営を司る本部には救世教のどのような理念を読み取ることができるだろうか。以下、教団本部の各階における部局の布置を記述し、その構造を考察してみたい。

サンパウロ市内の比較的高級な住宅地であるヴィラ・マリアーナ(Vila Mariana)地区に位置するブラジル救世教本部には、サンパウロ市の中心であるセ広場(praça da Sé)の地下鉄駅から5つめのアナ・ホーザ(Ana Rosa)駅から徒歩6~7分で到達することができる。入り口を入ると8階建てのビルがあり、その左奥に本部教会が位置している。救世教では信者は特定の教会に所属することになっている。しかし、この本部教会は月次祭といった儀礼を行なうものの、所属する信者を持たずあくまでも本部に付随した特別な教会である。

本部ビルの各階を見ていこう。地下はガレージとなっており、荷物運搬用のトラックから教団幹部が乗るブラジル国内で生産される車としては最も高級な乗用車までが停められている。1階には、さまざまな目的に用いられるホールがある。そこには軽食や飲み物を供することができるようにキッチンとカウンターが設置されており、聖地参拝団が聖地へ赴く前に立ち寄った際にくつろいだり、100人程度の集会や講演会が行なわれたりする。1階と2階の間にある中2階には人事部、オーディオ・ヴィジュアル部門、ホールがある。オーディオ・ヴィジュアル部門に配属されている職員がプロ用器材を用いて制作するビデオは、救世教を紹介するものやさまざまな式典のドキュメンタリーである。年に1度開催される地上天国祭といった重要な式典の映像は、式典翌日には編集されたものが各地の布教施設に送り出され、サンパウロへ赴くことができない信者たちでもその様子をビデオで知ることができるようになっている。また、たとえば聖地のドキュメンタリーなどの救世教を紹介する内容のビデオは信者に配布されたり販売される。この部門の充実ぶりに、救世教が映像というマス・メディアの持つ中央集権的性を救世教が認識し力を入れているかを見て取ることができる。

1階のホールと比較するとよりフォーマルで美しい内装が施されている中2階のホールでは、華道や陶芸の展覧会が開催される。2階には、食堂がある。本部で働く40~50人の職員や外来者おおよそ100人分の昼食をつくる。夕食をとる人数は減少するものの、キッチンでは専属のスタッフが調理している姿が終日絶えることがない。3階は主に華道山月関連の部屋で占められており、

月曜日から金曜日までは夜のみ、土曜日には昼と夜、5つの部屋でレベルに合わせて華道の授業が行なわれる。また、子供向け読物『プラネット・アズール』(青い惑星)の編集局が置かれる。4階には、光輪、編集局、祖霊祭祀局がある。「光輪」は、ブラジル救世教の外郭団体である。救世教では、琉球大学の比嘉教授が提唱するEM(複数の微生物を混合したもので、液体で流通している)を用いた食物の栽培を奨励している。サンパウロ州のリオ・クラークの直営農場でこの試みが開始されたが、現在ではサンパウロ州内に5箇所、州外ではリオ・デ・ジャネイロ、サルバドール、ゴイアス各州にそれぞれ1箇所ずつ合計10箇所にまで増えている。「光輪」は、これらの農場で生産された有機栽培農産物や、抗生剤を含んだ飼料を用いずに飼育した鶏の肉や卵などの販売を行なう。救世教の布教施設で有機栽培農産物などが売られている場合があるが、それらはこの「光輪」を通して配給されたものである。編集局では翻訳や教団刊行物の編集に携わる人々が働いており、祖霊祭祀局には30万の信者の50万近いの祖霊の情報がコンピューターに入力されている。5階には、月刊の教団新聞である『ジヨルナル・メシニコ』の編集局と財務局が置かれ、6階には設計局、経理課、管理部がある。

7階を占めるのは布教の基本方針を決める宣教本部である。本部最上階の8階の雰囲気は他の階とは全く異っている。赤い絨毯、重厚な木の扉といった重厚さを演出するインテリアが施されたこの階には本部長と副本部長の部屋がある。この8階へとエレベーターで登っていくことは、救世教を治める高みへと運ばれることなのである。救世教が展開している営為を担う部局のほぼすべてが本部の中に存在している。そのなかには、活け花、自然農法といった「宗教」という言葉によっては一般的に想起され得ないような営為を司る部局も含まれている。だが、それらの営為は救世教の教義においては根本的なことであり、それを知る者にとっては何の不思議もないことである。そして、こうしたさまざまな専門的領域を扱う官僚制度的な部局が配置されている地下から6階の上の7階にこれらを統べる宣教本部が置かれ、その上の8階にはブラジル救世教の責任者である本部長室と副本部長室が置かれているという事実は象徴的である<sup>(10)</sup>。救世教が説く霊界は階層的になっており、霊の進化は上への方向へ行なわれるが、本部の諸部局の布置はこの考え方と類似性を持つ<sup>(11)</sup>。というのも、救世教においては布教こそ最も重要であるという認識があるからである。

建築史学者のノルベルグ＝シュルツは、人間は「環境のなかに自分自身を定位して、ある秩序を確立することを試みる」と述べているが(ノルベルグ＝シュルツ 1991:20)、本部で働く専従者や研修生は1日のかかなりの時間を本部の建物で過ごすことによって、教団の価値観を身につけていくのである。

## 6. 研修生制度の概要と意味

もしあるブラジル人がなにか悩みや心配事があるて救世教の布教施設—教会であれ、布教所であれ—を訪れたとしよう。原則的に、彼ないし彼女は、容易に専従者に会って、話をする事ができる。信者であってもなくてもだ。万一専従者が出払っていたり多忙でその時会うことができなくても、予約をしておけば会うことができる。そして専従者は話を聞いてくれ、アドバイスをしてくれる。

だが、このような気軽さとは全く異なる指導のシステムがある。幹部候補生に対する指導のシ

システムがそれだ。教会には、多くの場合若い研修生候補者がいる<sup>(12)</sup>。彼らの夢は選抜試験に合格してサンパウロの中央教会で教育を受け、さらに試験に合格して日本に行き、そこで1年ほどの研修を受けることだ。日本語の才能があれば、教団は日本の大学へも行かせてくれる。だが、彼らに対する指導はたいへん厳格である。本節ではその指導のあり方を導きの糸として、世界救世教が日本で生れた教団としてどのようにそのアイデンティティーを保持しているのかを考察する。

先に述べたように、救世教は1971年に将来の幹部養成を目的として青年男子の研修生制度を開始した。本部での研修を修了した研修生は一定期間日本に派遣される。そしてそのなかからは、教団から学費・生活費の援助を受けて日本の大学へと進学する研修生もいる。ブラジルで布教を行なっている他の日系新宗教教団のなかで、専従者あるいはその候補者の日本への派遣を救世教のように定期的に行なっている教団は存在しない。

さて、70年代の研修生たちは現在そのほとんどが教団の中堅専従者や幹部となっている。研修制度開始当時は不定期採用で採用がある場合でも人数は1～2人と少なかったが、80年代初頭からは定期的に毎年5～6人採用されるようになり、80年代後半には10人程度へと増加した。また、1990年からは女子も採用されるようになった。

研修生として1991年から1992年の間に本部で研修を受け、1992年秋に日本へと派遣された男子第14期研修生を例として、その選抜のプロセスをみておこう。1990年、ブラジル全土でおよそ35人の研修生候補生が各地の教会で研修を受け始めた。そして、その年の暮れには、研修生選抜試験が行なわれ、12人が研修生として選ばれた。本部での2年間の研修で5人が研修生を辞し、最終的に7人が日本へ派遣されることになった。しかし1人は結婚することになり派遣から外されたため、結局6人が日本へと派遣された。彼らは6ヶ月間熱海の本部で研修を受けた後、各地の教会へ派遣されおよそ6ヶ月間日本語で布教を行なった。その後、4人はブラジルへと帰国したが、2人は日本の大学への進学を希望した。そのうち教団が受験を認めた1人が日本の大学に合格した。進学した1人を含めて研修終了後全員が専従者となったが、1人は後に専従者を辞したため、1999年12月現在で日本へ派遣される予定だった7人の研修生の6人が専従者として布教活動を行なっている。このように教団エリートを目指す若者は、研修生候補生→研修生としての本部での研修→日本での研修→再び本部での研修→現場といったいくつもの関門を経て、一人前の布教者になっていくのである。

さて、男子と女子では研修制度は若干異なっているが、それは後に記述し検討するとして、まず男子の研修制度を見ていくことにしよう。研修生を志望するものは、まず最寄りの教会長に願い出て、許可が下りれば研修生候補生として教会に住み込んで、雑用をこなすことになるのが原則である。買い物に行ったり、デスク・ワークをしたり、専従者のために車を運転手したりして一日が過ぎていく。その間に、教会や個人宅で信者たちに浄霊を行なうのである。こうした仕事をこなすことによって布教施設がどのように運営されているかを体験的に理解するという経験は、数年後彼が専従者として教会へ配属された時に、さらには自分が責任者になって布教所を切り盛りする時に役に立つ。現在はある集会所の責任者として布教を行なっている助教師は、日本語も交えて私に次のように話してくれた。「(当時は)本当に忙しかった。仕事に追われて、みおしえを勉強する時間がなくて、これでいいのかと考えたこともあったよ。だけど、今はあの経験が集会所を運営する上で本当に役にたっている」。こうした多忙な、しかし後から振り返ると有益な



およそ1年間を研修生候補生として過ごした後、教会長から推薦が得られれば研修生候補生は研修生選抜試験を受けることになる。

研修生を経て日本の大学へ進学して卒業し、現在は布教に携わっているパウロの信仰生活をたどってみよう<sup>(13)</sup>。裕福な家庭の3人兄弟の長男として生れたパウロは、彼が幼い頃両親が救世教に入信したので救世教に親しんで育った。一家5人が全員が救世教信者である。パウロは将来銀行員になろうと考えていたが、受験勉強をするうちに物質的な豊かさだけに拘泥することに疑問を感じ始め、専従者になろうかとも考えるようになっていた。パウロは現役でブラジルでも1, 2を争う名門大学の理系学部に合格した。だが、彼の合格の報告を電話で聞いた教会の責任者は「で、どうするんだ」とパウロに質問したという。パウロは、自分が研修生候補生となるか大学へ進学するかを迷っているのを責任者はすっかり分かっているのだと思ったという。専従者となるのが神の意志に従うことだと感じたパウロは、大学へは入学せずに研修生候補生となることに決めた。パウロの周囲にとっては彼の決断は晴天の霹靂だった。敬虔な救世教信者だった両親もこの決断には驚きを隠さなかった。しかし、周囲の混乱も1週間ほどでどうにか収まり、パウロは研修生候補生となり教会に寝泊まりするようになった。

作文、教義についての筆記試験、インタビュー、受験者に課される3つの試験に合格し、研修生として採用された。以下、本部での研修生の日常生活を描き出してみよう。後に分析するように研修生は本部での研修でブラジルの価値観とは異なった価値観を体験的に教え込まれるのである。研修生になるとサンパウロの本部の近くに教団が持つ研修生寮で生活するようになる。パウロの生活は一変した。地元の教会では彼と同じ身分の者はいなかったし、教会に泊まり込んでいたのは彼だけだった。だが、今度は他の11人の研修生たちと研修生寮で寝泊まりすることになった。運が良ければ個室を与えられるが、そうでないと一部屋に2人から4人となる。また、研修期間は2年間なのでパウロたちが着任したときには本部では1期上の研修生たちが既に研修を受けつつあった。

研修生の生活は候補生とは大きく異なる、とパウロは言う。まず、日本語の勉強をするようになること。しかし、より重要なのは、それまでは直接接する機会などなかった教団幹部とほとんど毎日直接顔を合わせるようになることである。幹部の考えや行動に直接触れることができるという意味で、これはたいへん大きな意味を持つとパウロは指摘する。

研修生は2年間のうち半年間サンパウロ市内の布教施設に配属され、そこで布教を実践的に学ぶ以外は、月曜日から土曜日まで本部で研修を受けた。本部での研修期間中のパウロの1日は次のようである。未明に幹部を車で空港まで送るといった特別な仕事がなければ、パウロが朝起きる時間は研修生候補生時代より少し遅くなり7時くらいになった。シャワーを浴び本部へと向かう。食堂で朝食をとった後、本部教会の掃除をしたり各階へミネラル・ウォーターを運んだりした後、8時からの朝拝に参加する。朝拝が終わった後、6階の宣教局へと行き幹部へ挨拶をする。その後で、講義や御用と呼ばれる仕事が始まる。研修生は本部で、日本語、教義、活け花を学ぶ。そして、各自が割り当てられた仕事をするようになる。男で運転免許を持っていれば幹部の運転手の役も果たすことになる。当番制で寮の掃除やトイレ掃除、本部での当直も行なう。

女子の研修制度に目を転じよう。1989年に開始された女子研修生制度の当初の目的は、男性専従者の良き妻を育成することであった。救世教ではかねてから男性の専従者が多忙のために妻と

不仲になったりさらには離婚したりするということが問題となっていた。そのため専従者の仕事をよく理解し、これをサポートする妻が要請されていたのである。女子と男子では研修生制度に若干の差異があると先に述べたが、それは研修生に課されるノルマという点においてであって、少なくとも女子の採用が決定された際の目的は男子のそれとは全く異なっていたのである。

ではノルマの面での差異はどのようなものであったのか。第1期生は研修生候補生を経ずに、直接本部での研修が開始されたが第2期からは男子と同様各地の教会で1年程度の研修生予備生を経て試験を受け本部での研修生採用となった。先に見たように男子の場合は教会に住み込みとなるが、女子は自宅から教会へ通うことになっている。そして、本部での研修も男子が2年なのに対し、女子は1年であった。また、女子は料理を学ぶことも義務づけられていた。

教団の当初の目的は達成されたのだろうか。非常に優秀な人材が応募したとされる女子1期生は10人が採用された。本部での研修は1年間の予定だったが、日本政府がなかなかビザを発給しなかったため2年近いものとなった。研修期間中に2人が家庭の都合などで辞し、3人がブラジルでの宣教を行なうようになったが、現在は直接宣教に携わっていない。1991年7月からの日本での研修を受けることになったのは5人となった。そのうち日本の大学へ進学を希望した3人は1993年に合格し1997年に卒業している。1999年末現在、この5人のうち2人は独身で日本およびブラジルの大学院で学んでいるが、3人は専従者と結婚している。1991年採用の第2期以降、大学へ進学したものは1人だけである。研修終了後、女子研修生の多くが専従者と結婚しており女子研修生制度は開設当時の目的を達成しているといつてよい。

## 7. 天職としてのエリート専従者—教団のアイデンティティ—維持戦略

専従者になることが神の意志に従うことだとパウロは感じたことと記したが、現在研修生であるアルベルトも同様の経験を持つ。名門大学の工学部の入学試験に一番得意だった数学ができずに失敗した彼は、それを神が自分の進むべき道はこれではないと知らせているのだと考えるにいたる。では、なにが自分がすべきことかを考えるうちに専従者になることだと考えた彼は研修生を志願したのである。既に見たように研修候補生と研修生の生活は苦労が多い。しかし、「使命が大きいほど苦労が大きい」とパウロが言うように使命感の自覚こそが研修生や候補生にそれに耐える力を与えているのだ。

男女を問わず研修生たちはサンパウロの本部の研修期間中に、日本語、活け花、教義を学ぶ。だが、より重要なのは、体験によって身につくことだと思われる。パウロが言うように、研修生は教団幹部に直接接することで彼らの考え方や信者との接し方を学ぶ。だが、それと同様に重要なことは救世教の価値・倫理観を身につけていくことである。研修生たちはそれを日本人幹部たちと日常的に接することによって学ぶだけではない。それだけではなく、研修生たちは本部に既存の規範に接することによってそれを体験的に学ぶのである。その中で最も重要なのは教団内のヒエラルキーの絶対性である。第一のヒエラルキーは、教団内の階級のヒエラルキーである。私が調査を始めた当初、日本人教師の指示に対して研修生たちが「はい、先生」と返答するのを頻繁に耳にして驚いた覚えがあるが、教団幹部と研修生の間の上下関係は徹底しており、教団幹部に対しては「先生」という日本語の敬称が必ず用いられるのである。先述のように朝拝の後、彼らは皆本部6回の国際局へ行き、幹部たち—そのほとんどが日本人—に挨拶をする。彼らは、日

本語で「お早ようございます、先生」と言い、幹部に向かって頭を下げて回るのである。幹部は座ったままで、「おはよう」と応える。このような現在日本で失われつつあるような挨拶の習慣が、そこにはある。

日本では中学から大学では上級生に、社会に出てからは上司に、敬語を使うことが長らく行なわれてきている。研修期間が2年間のため研修生は本部で1級上の研修生と本部でしばしば顔を合わせることになるが、彼らに対して敬語を使うといったようなことはない。しかし、研修生出身の若い専従者に対して研修生たちは「先輩」という日本語を用いる場合が多い。パウロは日本語で次のように語る。

自分は本当に尊敬できる人じゃなきゃ先輩という言葉は使わなかった。けど、上の人になら誰でも先輩を使ってる研修生もいた。

このように、若い教団エリートたちは研修生制度によって教団内の階級のヒエラルキーを実感していくのである。

第2は男女間のヒエラルキーである。これは前節でふれた救世教における布教最優先と関連している。救世教においては布教のうち開拓布教—だれも信者がいないような地域で布教を行なって布教施設をたちあげることが—がもっとも尊重されている。ところが、開拓布教が許されているのは男性のみである。女子研修生のなかで開拓布教を志す者も少なくない。だが、開拓布教は男子にしか許可されていない。ある教団幹部は布教の意欲にみちた女子研修生たちについて次のように語る。

レイプされるかもしれないし、殺されてしまうかもしれない。ここはブラジルなんだから。そう説明しても納得しない子もいますよ。「神に捧げた命です」っていつてね。でも、そんなことになったら親御さんにあわせる顔がない。

このような理由で女性に開拓布教は許可されていない。であれば、教団のヒエラルキーの上層に達することは非常に難しい。本部においても女性はバックオフィスの仕事に従事しているし、女子研修生開始の最初の目的は先に見たように専従者の妻の養成だったのである。

ここに示されている二つのヒエラルキーについての規範は50歳代の教団の日本人幹部のものと考えて大過はないだろう。では、このような規範を研修生たちが自分のものとするのは教団にとってどのような意味があるのだろうか。彼らはエリートであり、彼らは日本での研修を終えるとブラジルで布教の第一線に立つのであり<sup>(14)</sup>、そのうちの何パーセントかは遠い将来幹部となって本部で布教の指揮をとることになる。であれば、研修生たちに日本で研修させることによって実際に日本を体験させることとともに、教団の規範を体得させることは非常に重要な意味を持つのである。そして彼らが身につけた規範を中央集権体制によってブラジル全土の布教施設へと供給するのである。現在、信者の95%以上が非日系のブラジル人である救世教は、研修生制度と中央集権制によって日本で誕生し日本文化の背景を持った宗教であるというアイデンティティーの維持を試みているのである。

## 註

- (1) 1960年代後半におけるブラジルでの生長の家の非日系ブラジル人に対する積極的布教の開始という方向転換や、日系コミュニティ内の宗教であったブラジルの天理教が最近是非日系の信者を集めているという事実はその証左である。
- (2) 生長の家、世界救世教、PLのブラジルの新宗教3教団は、ブラジルと同様ポルトガル語が公用語となっているアンゴラで現在布教を行なっている。
- (3) 経営者たちがその企業で働く日本人と現地の人々との文化的軋轢を克服する努力については、たとえば以下を参照せよ。安室他 1997: 103 - 4, 148 - 9。
- (4) 第2次世界大戦終戦までのブラジルにおける布教については、生長の家ラテン・アメリカ伝道本部 1973, 中牧 1986 および 1990 を参照のこと。
- (5) 生長の家では本部講師 18 人のうち日本人・日系人が 12 人、PL ではすべての専従全体で日本人 26 人、日系ブラジル人 23 人、非日系ブラジル人 27 人となっている。一方、救世教では、教師 25 人のうち日本人が 13 名、日系ブラジル人が 1 名を占めている。
- (6) 救世教の教典『天国の礎』(1991) 所収の岡田茂吉「宗教は世界的たれ」(168 - 9) および「世界人たれ」(438 - 40) を参照のこと。
- (7) ここで「黒人」という言葉を用いないことには理由がある。ブラジルにおける人種概念については Skidmore 1993 を参照のこと。
- (8) カンドンプレについては、たとえば Bastide 1978 を参照のこと。
- (9) 代表的な例として、1970 年京都の秀明教会が独立した神慈秀明会があげられる。救世教からの分派・独立については対馬路人「世界救世教の影響」(1990) を参照のこと。
- (10) ここでの官僚制は、ウェーバー的な意味での官僚制度、すなわち各部署が規則によって秩序図づけられた明確な権限を持つという官僚制度をさす。ウェーバー 1960: 60 を参照のこと。
- (11) 霊の進化については松岡 1997 を参照のこと
- (12) 研修生候補者の受け入れは布教所や集会所では行なわれておらず、教会すなわち信者数が 3,000 人以上いる布教施設に限られている。このことは教会の責任者が候補生の指導をするに相応しいという認識にもとづいている。
- (13) プライバシー保全のため、インフォーマントの名前は仮名とし本質に関らない部分で変更を加えてある。
- (14) 他の国で布教を行なうこともあれば、教団幹部が布教よりは別のことに向いていると考えるとすればその部署に配属される。

引用文献

- Bastide, Roger *The African Religions of Brazil*. Baltimore: Johns Hopkins University Press. 1978
- Becker, Anne "Nurturing and Negligence: Working on Other's Bodies in Fiji." In Thomas J. Csordas, ed., *Embodiment and Experience*. New York: Cambridge University Press. 1994
- 井上順孝 【海を渡った日本宗教】東京：弘文堂 1985
- Hubert, James M. and William K. Brandt *Managing the multinational Subsidiary*. New York: Holt, Reinhart, and Winston. 1980
- Kono, Toyohiro *Strategy and Structure of Japanese Enterprises*. Armonk: M. E. Sharpe. 1984
- Maeyama, Takashi "Japanese Religions in Southern Brazil: Change and Syncretism." *Latin American Studies (University of Tsukuba)* No. 6 : 181-238. 1983
- Maeyama, Takashi and Robert J. Smith "Omoto: A Japanese 'New Religion' in Brazil." *Latin American Studies (University of Tsukuba)* No. 5 : 83-102. 1983
- 松岡 秀明 「霊の進化—ブラジルにおける世界救世教の受容をめぐって」『東京大学宗教学年報』XV 1997
- 中川多喜雄 「海外関係会社管理のための予備的考察」『アカデミア』経済経営学編, 第80号 1980
- 中牧弘允 【新世界の中の日本宗教】東京：平凡社 1986
- 「アメリカでの布教：ブラジル」井上他編『新宗教辞典』東京：弘文堂 1990
- ノルベルグ＝シュルツ 【建築の世界—意味と場所】東京：鹿島出版会 1991
- 岡田茂吉 【天国の礎】(新装版第3版) 発行場所記載なし：世界救世教 1991
- 生長の家ラテン・アメリカ伝道本部 (編) 【生長の家ブラジル総支部 20年史】サンパウロ：生長の家伝道本部 1973
- Skidmore, Thomas E. *Black into White*. Durham: Duke University Press. 1993
- 対馬路人 「世界救世教の影響」井上他編『新宗教辞典』東京：弘文堂 1990
- ウェーバー, マックス 【支配の社会学 I】東京：創文社 1960
- 安室憲一, 関西生産性本部編 【現場イズムの海外経営】東京：白桃書房 1997

## **Elevation in this world: Messianity's effort to maintain its identity**

Hideaki MATSUOKA

More than a century has passed since Japanese religions started propagation in foreign cultures. While some Japanese religions have been accepted chiefly by Japanese diaspora, other religions, such as Soka Gakkai, Perfect Liberty, and Messianity, which is the religion that I study in this article, have succeeded in going beyond the ethnic barrier. Once accepted in a foreign culture, a religion faces identity problems; the more it is accepted by non ethnic Japanese people, the more the Japaneseness of the religion may fade.

The Church of World Messianity of Brazil, a Japanese new religion that has been propagated in Brazil since 1956, currently has 300,000 followers and over 95% of them are non-ethnic Japanese. In 1971, Messianity started an education system goal of which is to bring up gifted young elite who will be leaders of the religion in future. The system got off the ground in the 1980s and young eager followers all over Brazil applied to become *seminalista*, who study at the headquarters in Sao Paulo for two years. In Sao Paulo, they keep face to face contact with Japanese executives and have to study doctrine, Japanese and Ikebana. Those who pass final examination go to Japan to study Japanese culture and propagate in Japan.

As ex and current *seminalista* point out, they learn not only doctrine but Japanese culture and ways of thinking by staying with Japanese executives in Sao Paulo and in Japan. By means of this effective system, Messianity's trial to maintain Japaneseness has succeeded so far.